

猫 衰 通 信

第 104 号

平成 28 年
(2016 年)
9 月 15 日発行
(年 4 回発行)

東明雅先生の連句

青木秀樹

先日猫衰同人会での坂本孝子会長のご挨拶の中で、東明雅先生の座談会の生テープを所持されているとの話があり、出席メンバーの名前を聞いてさっそく調べてみました。『国文学』「解釈と鑑賞」(昭和六十二年五月号・至文堂)の特集「連句(俳諧)への招待——伝統と創造」全編の巻頭を飾る座談会で「連句の楽しさ・面白さ」と題して明雅先生のほか、暉峻康隆氏、草間時彦氏、宇咲冬男氏が出席、出席者の発言から一月十六日に催されたことが分かります。明雅先生は先輩の暉峻氏に遠慮されている様子でしたが、それでもカルチャーセンターでの実績、俳諧芭蕉忌での作品例、小出きよみ氏の『恋句曼荼羅』から例示などをされています。

当時、東明雅先生は連句復興に死にも狂いで取り組んでこられた時期にあたります。明雅先生はACCの場を与えられたことを生かし、連句の本質の講義と連句実作の実績をあげました。多くの人に連句の捌の経験させたこと、ねらいも、連句の捌のできる人材を早く作ることにあったと思われれます。

先生は連句の本質は「詩」であること、特に季の移り変わりを表現できているかどうかを気にされています。また、実作における本質は「付け」と「転じ」にあることをくり返し述べられ、根津芦丈師の「あるものは付く、ないものは付かない」との言葉を「ありそうなものは付く、ありえないものは付かない」として教えられました。また、「転じ」にばかり気を配り、「付け」をないがしろにすることを厳しく咎められました。

先生はまた、よく連衆に質問されました。それはなにか、どういうつもりで付けたのか、など新人や中堅クラスの人に質問し、納得できれぱすぐお採りになったこと、すなわち人を見て法を説くのが先生の特徴でした。リュックサックの中から『現代用語の基礎知識』と『逆引き広辞苑』を取り出されるのを見て、今なら電子辞書で間に合うのではないかと思いましたが、それも先生の演出だと後で知ったことです。

猫衰会では先輩のすることを見て、後輩が学ぶというよい風潮があります。明雅先生とは違いますが、先輩はそれなりに気を配っています。分からないことは先輩に尋ねればよいと思えます。先輩が分からないればさらにその先輩に聞

●目次●

第百三十七回例会藤祭興行 二十韻八巻	2
民俗学と連句……鈴木了斎	4
亀戸天神社奉納直会興行 二十韻二巻	5
電撃のように「正式俳諧執筆を終えて」 坂本孝子	6
第三十回亀戸天神社藤祭正式俳諧二十韻	6
藤祭正式俳諧配役	7
事務局たより	8



二〇一六年七月十三日『東京新聞』夕刊文化面(p4参照)

く、こうして連句の本質を理解してゆけばよいのではないのでしょうか。中堅クラスの方も「自分分はこう理解している」ということが、本質に合っているのかどうかもう一度思い返すよい機会になるのではないのでしょうか。

花園社の座

二十韻「藤匂ふ」 副島久美子 捌

藤匂ふ風吹き抜ける神楽殿 久美子
 吟声受けて亀の鳴く池 秀樹
 猫の仔のじやれる相手を選ばずに 一有
 ポップコーンをカップ山盛り 鄭和
 月暑し地震を逃れた車中泊 蓉子
 髪洗ふ湯を他所に求めて 有
 後ろから抱き締めるなど裏切りと 和
 孫の笑顔にめろめろの父 全
 履歴書を二度も三度も書き直し 樹
 フイトンチツドの届く五感に 蓉
 ナオ 破魔矢挿す鴨居の辺りぬらりひよん 和
 闇汁の実は永久に謎 蓉
 兵馬備総ての顔は違ふてふ 全
 鎌振り上げる蠟螂の影 和
 聴き入るは琴に管弦望の夜 樹
 車座に着き新走り酌む 有
 ナウ 七冠王若き棋士なり快拳なり 蓉
 海図なき海帆を上げる夢 全
 開通のテープカットに花ぶぶき 有
 のどかに暮れて宿の賑はひ 執筆

連衆 青木秀樹 白石一有 高山鄭和
 五味蓉子

弁天社の座

二十韻「越天楽」 高橋豊美 捌

藤波に笙簞築や越天楽 豊美
 太鼓橋には春装の人 忠史
 いかなごを鍋いつばいに炊き上げて 雅子
 居間のソファーに読みさしの本 郁子
 温泉街路面電車に夏の月 富子
 夕涼みする川端の床 豊
 膝枕この感触が癖になり 史
 うつつの恋はいつも新鮮 史
 見晴るかす青い山脈けふも行く 郁
 職業欄の記入ガイドと 富
 ナオ 震して西陣の隅機の音 豊
 びつたりと合ふ餅搗きの息 史
 躍り口幸せ過ぎて潜れない 史
 肩させ裾させえんま蟋蟀 雅
 みちのくの寺社訪ふ旅に月を愛で 富
 新蕎麦あてにぬる畑の酒 郁
 ナウ 大臣のちよつと軽めの言多く 豊
 裏の広場で毬投げの子ら 史
 ひもすがら駆ける優駿花万朶 郁
 代々つづくお蚕の世話 富

連衆 根津忠史 武井雅子 東郁子
 名古屋富子

力石の座

二十韻「藤房の」 松原弘子 捌

藤房の揺れてゆかしき神楽殿 弘子
 朱の橋渡る夏近き頃 淳子
 雲雀笛時を忘れて作るらん 文伸
 母の自慢のオムレツの味 通齊
 塾帰り子等を守る寒の月 志世子
 屏風の陰で見せる笑ひ絵 淳
 三婚の夫婦なれども初初し 全
 犬との散歩健康の元 世
 上野駅乗降客のきりもなく 伸
 コンビニのカフェはやる昨今 斉
 ナオ 金魚鉢また慎重に水替へむ 全
 草刈鎌に熟練の老 伸
 輪になつて歌も飛び出す昼の酒 淳
 秋裕着け夫人艶やか 世
 月明に油断大敵写されて 淳
 サンマの煙消ゆる路地裏 伸
 ナウ 峡谷を走りて無残土石流 淳
 一心不乱般若心経 伸
 夢に見た世界か花の吹雪く村 斉
 鴉長鳴く春の夕暮れ 世

連衆 上月淳子 若林文伸 菅原通齊
 秋山志世子

紅梅殿の座

二十韻「太鼓橋」

三木俊子

捌

太鼓橋渡るや触るる藤の房

俊子

足を止めれば鶯の鳴く声

了齋

女性誌に春のコートの競ひぬて

敦子

チーズケーキの香り漂ふ

吉文

金魚売帰りを急ぐ月の路

英雄

宵祭にて逢ふと約束

未悠

二つ枕の煙草の焦げが知つてゐる

英

非常口など確認の癖

敦

オペラ座で小澤征爾と熱演し

吉

遠くが見たけれやジャンプしなさい

齋

ナオどこにゐる日本狼きつとゐる

吉

冬の銀河に祈る子の幸

悠

叡山に響く声明朗々と

全

秘して語らぬ恋もあるとか

吉

名を問へば露と応へて俯きぬ

齋

月影ばかり残る四阿

全

ナウ今年酒座敷童と酌み交はし

英

北へ北へどこまでも行く

敦

懸崖の花の枝垂れて人を呼び

悠

胡蝶の色を映す白壁

英

連衆 鈴木了齋 武井敦子 永田吉文

鈴木英雄 柵町未悠

御嶽社の座

二十韻「渡る三世の」

内田遊民

捌

藤の香や渡る三世の太鼓橋

遊民

池の浮島亀の鳴く頃

暁巳

山笑ふ耳学問を繕きて

孝子

何時も斜めに割るる割箸

アンズ

ウ 夕月に今年も母の集汁

佐紀子

童舞ひ込むスカーフの中

瑞枝

国際線アテンダントに憧れて

孝

密輸の媚薬効果抜群

巳

ごみ出し日空の酒瓶振つてみる

ア

自治会からも地震の献金

孝

ナオ 着膨れのひとで満員コンサート

佐

チエロ弾きの指解すストープ

枝

留守番の猫等こんがらがつて寝る

ア

静かに帰る後朝の月

孝

菊枕次に逢ふ日を数へつつ

巳

領収証に足がつく秋

孝

ナウ 加賀の国忍者屋敷のそつげなく

枝

塩気抜きすぎ不味い沢庵

巳

落研の寿限無寿限無に飛花落花

ア

双子の吾子と交すふうせん

枝

連衆 島村暁巳 坂本孝子 松島アンズ

間 佐紀子 佐々木瑞枝

鶯の碑の座

二十韻「天神社」

石川葵

捌

たけなはの春吟ずるや天神社

葵

藤の香に立ちみじろがぬ鷺

路子

五合釜蛤飯を炊くならん

文子

世話好きの人も忙しく

泉美

ウ 月の道ボーイスカウト引率し

有子

親父に似たる案山子眺むる

昭

とんぼ切り見得も鮮やか村芝居

泉

参つちまつた彼の目力

文

バツイチでかまわれないよといつてくれ

路

北極圏に不凍港あり

有

ナオ 狼は眷属揃ひ遠吠えし

路

一危ふさはらむ野党連合

文

就活もままならぬ世にうち惑ひ

泉

ビールがぶがぶ前後不覚に

有

きらきらと月の光に蜘蛛の糸

泉

夢かとはかり嬉し君現れ

文

ナウ 年の差を意にも介さずペアルック

昭

金婚式に孫二十人

路

和顔施を説く僧ありて花の山

葵

大の字に寝る芳草の原

昭

連衆 倉本路子 橘 文子 金子泉美

佐々木有子 松原昭

平成二十八年四月三十一日
於 亀戸天神社

五歳菅公の座

二十韻「亀の屋」

高塚霞 捌

藤房の香に微睡むや亀の屋

霞

春たけなはの穂やかな風

佳之子

菜飯茶屋隣合せの語らひに

美奈子

パッチワークの座布団を置き

節子

月の夜は杭に繋がれ鵜飼舟

徹心

小暗がりへと誘ふ螢火

霞

密会の床に社章を見つけたる

之

けふの訓辞は大胆細心

奈

ハーレーの爆音すべて消して行き

節

南の国にハリマオの伝

心

ナオ 兵士らはふるさと偲び紙の雪

霞

寒稽古とて老妓張り切り

之

弁天がちよいと焼きもちふたり連れ

奈

ふくれつ面がまたかはゆくて

節

美術展アブストラクト出品し

心

下駄にかみつく野良犬の月

之

ナウ 秋手入腰手拭の庭師くる

霞

寂びた木遣の響く露地裏

奈

樽酒を威勢よく割り花の幕

節

天守を越えて揚がる大風

心

連衆 染谷佳之子 鈴木美奈子 長坂節子

佐藤徹心

燐寸塚の座

二十韻「藤影戻る」

由井健 捌

風風いで藤影戻る心字池

健

聞くともなしに亀の鳴く声

壘

畦青む岬めぐりのバスにゐて

転石

地元銘菓をゆるキャラが推す

千恵子

ウ 寒月に語り倦かざる下戸二人

純子

姫始の夜小さきいさかひ

千

塗つた爪ちよつと弾いて拗ねてをり

石

愛煙家達ハチ公の前

純

悪筆の大学教授デモに行く

千

止まぬ地震に揺れる列島

壘

ナオ 夏来たる伯刺西爾五輪どうなるか

全

浴衣の少女産毛眩しき

千

好ききらひ星占ひにきいてみる

純

目ぢからを込め掻き口説く月

石

境内に秋狂言の幕張られ

壘

さんまを焼いてもてなしとなす

純

ナウ 日本語がわからぬ友と碁を打ちぬ

石

スケベニンゲンオランダの都市

千

花爛漫行く処これ山河あり

千

しやぼん玉追ひ走り出す子ら

千

連衆 竹中壘 林 転石 鈴木千恵子

近藤純子

平成二十八年四月二十一日
於 亀戸天神社

民俗学と連句

鈴木了斎

七月十三日水曜日、東京新聞夕刊の文化欄に、新聞には珍しい連句関連の記事が五段抜きの大きなスペースで掲載された。歌人岡野弘彦氏が、日本の民俗学の創始者・柳田國男（一八七五～一九六二）の連句とのかかわりについて書いた「柳田國男 終生手放さなかつた「連句」と題する文章だ。

『本編以前の事』（岩波文庫）をはじめとする柳田の代表的な著作には、芭蕉俳諧への数々の言及がある。芭蕉俳諧そのものの評釈書も書き、自ら連句を巻くことも好んでいた。そのことは連句人には比較的よく知られていると思う。

若い頃は詩を書き、歌も詠んでいた柳田は、学問に集中するためにそれらをやめてしまったが、連句だけは終生手放さず、作品集も残している。

同じ民俗学者の折口信夫（＝歌人・釈道空・一八八七～一九五三）は、柳田にとつてよい連句仲間だった。記事には、柳田の娘の千枝が三十歳で夭折した際の追悼歌仙の表六句が引用されている。道空、柳叟、茅秋の三吟歌仙だ。「柳叟」は柳田の俳号、「茅秋」は折口の歌と民俗学の弟子、穂積忠の俳号。折口が柳田より若いにもかかわらず先に亡くなつてしまったあと「連句の相手のできる人が無くて、柳田はさびしかったに違いない」と岡野氏は書いている。その後は、これも折口の弟子の民俗学者で大森義徳という人が、時折上京しては柳田の連句の相手をしていただ。

このように、民俗学草創期の人達が多く連句を愛したのはなぜだろうか。より後の世代で、柳田や折口の民俗学を継承した

亀戸天神社奉納直会興行より二巻

平成二十八年五月十八日 首尾

於 錦糸町 サロン・卵と私

二十韻「江東の薄暑」

坂本孝子

捌

人波を縫ふ江東の薄暑かな

孝子

眼洗へる街の新緑

弘子

隅の卓フルーツティをチヨイスして

有子

ビジネスマンのスマホ確認

健

ウ 月光に微かに動く地震計

弘

猫抱き寄せる肌寒いから

孝

ぬくめ酒僕の好みを分る君

健

吉の神籤に声高の巫女

有

山嵐湖の小舟を舫ふらん

孝

傍聴券に長き行列

弘

ナオ六歳でサンタクロースは父と知り

有

革手袋で丸つくる月

健

柔道の連覇を果たす夢を見て

弘

浮世の果へ堕ちてゆく恋

孝

ラストダンスやはおまへと踊りたい

健

笑みをたたへるブロンズの像

有

ノウ文学も科学も名利追ひかけて

孝

知事の品位を糾問の春

弘

老木の花愛づる時無言なり

有

籠いつばいに採れた常節

健

連衆 松原弘子 佐々木有子 由井健

二十韻「新緑や」

高塚霞

捌

新緑や男橋から女橋

霞

直会終へて風薫る街

雅子

D51の試験運転滑らかに

秀樹

訪ひの声聞き覚えあり

霞

ウ ヴィンテージワイン取り出す月の宴

雅

城の跡地を埋める穂薄

樹

約束の場所へと急ぐ秋裕

霞

御狭なあの娘なぜか寡黙に

雅

さり気なく別れを告げるテクニク

樹

ラインぎりぎり打ち返す球

霞

ナオ南水洋捕鯨船団突き進み

雅

株値上りを祈る寒月

樹

ワンコインコンビ二弁当妻の留守

霞

活断層も動き兆して

雅

柳原白蓮ほどに恋ひこがれ

樹

古書肆の主長き鬚

霞

ノウ語り合ふ疎開話をあれこれと

樹

親子遠足楽しみに待つ

雅

目瞑れば紛るるばかり飛花落花

霞

自転車で行く囀の道

樹

連衆 武井雅子 青木秀樹

谷川健一（一九二一〜二〇一三）が、きわめて説得力のある言葉を残している。谷川も、歌会始召人をつとめた歌人でもある。

「民俗学の巨人である柳田國男と折口信夫はともに歌を作っている。（中略）この二人が歌を作ったというのは、たんなる偶然なのであるうか。

折口は弟子たちと一緒に歌の結社を作っているが、その弟子は国文学畑のものが多く、民俗学者は少ない（中略）。

民俗学はいやしくも学問であるから科学的な分析を抜きにすることはできない。しかしそれだけでは充分ではない。日本民族の意識の深層に沈澱して無意識化した伝承を発掘し、解明するには、するどい感性とふかい共感が必要である。その資質において柳田や折口が群を抜いていたことはいままでもない。」（『うたと日本人』講談社現代新書・序）

谷川は柳田や折口の名を借りて自らについても語っているにちがいない。ここでは主として歌について書いているため、折口の歌の弟子は国文学者ばかりで（折口は国文学者でもあった）民俗学者は少ない、としているが、短歌ではなく連句に焦点を当てれば、柳田、折口の周辺で彼らと連句を共にした弟子は民俗学者ばかりのようだ。谷川もまた、同書で日本の歌の淵源を歌垣の掛け合いに求め、連歌と俳諧の歴史についてきわめて説得力のある分析を展開している。連句人にとつての隠れた名著の一つだと思ふ（谷川については『猫蓑通信』第96号・温故知新・実ありて哀しびを添ふるも参照されたい）。事実と感性の両方を重視する民俗学者の言葉と、連句の核心として根津芦丈師、東明雅師から伝えられた「あるものは付く。無いものはつかぬ」「芭蕉の心法」などの言葉は、深いところで響き合っているにちがいない。



藤棚を渡って来る風のなかで

電撃のように

……正式俳諧執筆の役を終えて
坂本孝子

東明雅先生の十三回忌追善正式俳諧の執筆を
仰せつかるにあたり、実は様々な理由で辞退申
し上げようと思ったのです。

- ・ 膝関節の痛みや脚の痺れで立ち居が困難。
- ・ 物忘れで所作が覚えられないかも……。

第三十回
亀戸天神社藤祭奉納正式俳諧

俳諧之連歌 二十韻

藤波や人のさざめき靴の音
遠く霞める新しき塔
了斎 淳子 文字

めかり時開きしままの頁にて
ミルクのカップ掬ふ薄皮
千恵子 雅子 常義

ウ
稜線を染めて今宵の月昇る
そぞろ寒しとせがむ抱擁
新絹の繻子の帯解くもどかしさ
暁巳 常義

マウナケア宇宙飛行士記念館
キユンと胸打つ旅の想ひ出
路子 忠史

海底深くUFOの基地
葵 忠史

ナオ年の果狼魚をちり鍋に
食へぬ男を落とす爛酒
ひろみ 文伸

アイドルと呼ばれしひと古稀となり
大統領選行方如何にと
アンズ 文伸

月涼し神の託宣しかと受け
刀打つ匠夏草の庵
良子 豊美

ナウつれづれは籠の鸚鵡と語るらん
会つてたちまちツーカーの友
霞 有子

この角を曲がれば花の並木道
駆けてゆく児の手より風船
秀樹 執筆

平成二十八年四月二十一日 首尾
亀戸天神社神楽殿に於いて興行



執筆文台捌きの見せ場・水引をしごく

・八十路を越えた老体を曝すのは見苦しい。等々。大体、連句はその日その時の発句に誘われて、自分の身に積った埃を吐き出し、折よくば捌の目に留まって、一巻の輿に連なる充足感に尽きると思っていました。図らずもお引受けすることになり、当日、文台を膝前に置き、白扇を構えて明雅先生の遺影に面したとき、電撃のように背筋に走るものを感じました。浅学非才とさえも言えない唯の台所主婦を、連句というこんな素晴らしい世界へ導いて下さった明雅先生への感謝と崇敬の念が一瞬にして甦ったのでした。入門当時は、三十六句の中、先生の一直をいただいて、やっと一句に名が残残り、他の連衆の発想に驚き、劣等感と口惜しさで、もう連句は辞めようと何度思ったことか。それ故に今、遺影の前で文台捌をお目にかける倅せ

後日あらためて、猫蓑会一同の二十韻の懐紙八巻を本殿に奉納致しました。うやうやしき祝詞のお言葉は失礼ながらもがととして聞きとり難いのですが、断片的に「猫蓑会の……」「清らかなる魂」「美しき言の葉を連ね」「健やかに」「天神の御心を平らけく」「幾久しく」等、耳に残りました。今の世に生きて詠む俳諧の連歌はどのようなものでありたいのか。天神様の御心に適い、読む者、聞く者の心を愉しませ、平らかな世に遍く響くものでありたいと願ったのでした。正式俳諧奉納にあたり、拙き執筆を盛り立てて下さった宗匠はじめ、各御役の皆様にご心より御礼申し上げます。

を感じずにはいられないのでした。正式俳諧で使わせていただいた明雅先生の左沢文台は、猫蓑会の古い会員、五十嵐譲介氏の作と伺っております。猫蓑会発足以前、文京区神田川畔の関口芭蕉庵で二席ほどの月次連句会があり、そこでお見かけしたことがありました。また硯は先生ご愛用の御品だったのでしよう。重々しい紫檀の蓋には、歴代の執筆の手の記憶が残っているようでした。

四月、恒例の亀戸天神藤祭には、神楽殿での奉納となり、願わくば、学問歌道の神であらせられる天神様の御心に通う連句が首尾できますように、礼拝いたしました。今年は藤房も程よく花をつけ、拙い吟声を諾ってくれているようでした。



興行を無事に終えて、配役一同、ご神職を交えて記念撮影

亀戸天神社藤祭正式俳諧配役

- 宗匠 生庵秀樹
- 脇宗匠 橘 文子
- 執筆 坂本 孝子
- 知司 鈴木 了斎
- 副知司 根津 忠史
- 座配 佐々木有子
- 花司 林 転石
- 配硯 高橋 豊美
- 全 若林 文伸
- 老長 上月 淳子
- 鈴木千恵子

解説

事務局だより

●第百三十七回例会（亀戸天神社藤祭興行）が開催されました

四月二十一日（木曜日）、亀戸天神社にて、第百三十七回例会（亀戸天神社藤祭興行）が開催されました（前号既報）。正午より、神楽殿にて奉納正式俳諧を興行、そのあと午後一時より、八草に分かれて二十韻を興行しました。当日の二十韻八巻、正式俳諧二十韻、直会二十韻は今号のP2～4に収録されています。

●第二十六回猫養同人会総会が開催されました

六月十九日（日曜日）、新宿ワシントンホテル新館にて、第二十六回猫養同人会が開催されました。十一時より議事ののち、六草に分かれて歌仙を興行しました。当日巻かれた歌仙六巻は次号（第百五号）に掲載予定です。

●第百三十八回例会（平成二十八年年度猫養会総会）が開催されました

七月二十八日（木曜日）江東区芭蕉記念館にて、猫養会総会が開催されました。詳細及び当日の歌仙作品は次号にて。

●今後の予定

・芭蕉忌正式俳諧稽古 九月十四日（水曜日）
於 江東区芭蕉記念館

・第百三十九回例会
芭蕉忌正式俳諧興行・明雅忌脇起源心実作

十月十九日（水曜日）於 江東区芭蕉記念館

・第百四十回例会 平成二十九年初懐紙
一月十二日頃 於 グランドヒル市ヶ谷

●猫養基金にご協力ありがとうございます

・浅野欣也様 平成二十八年六月 一万円
・上田真而子様 平成二十八年六月 一万円
基金口座 みずほ銀行新宿新都心支店
猫養基金 普通預金 3376045

●猫養同人会へのご寄付ありがとうございます

・匿名 五千円

●会員の出版

・平林香織著
『誘惑する西鶴 浮世草子をどう読むか』笠間書院
A5判・上製・カバー装・四二八頁
定価：本体一万円（税別）

内容紹介（「Amazon」ウェブページより）

「いたるところに施された西鶴の仕掛けは、どのように埋め込まれているか。」

西鶴を「わかる作品」として読み直すべく、その小説作法を解明し、どう読むべきか、どう読まれるべきかを問う。そのための本書の挑戦は、一つには、創作方法としての「饒舌な沈黙」の発見、二つには、短編集の仕組みの解明、最後に、ジャンルの越境という点により行う。

短編なのに、一人の長い人生を追ったドキュメンタリーのように人物を描きます西鶴のリアリティはどこにあるのか。テキストのことばを読みながら、

作品のいたるところにある仕掛けを掘りおこし、新しい読みの扉を次々に開いていく。」

●新同人

三木俊子 若林文伸 奥野美友紀 田中秀夫

●訃報

・同人会員の前田曜子丈が四月二十五日にご逝去されました。つしんでご冥福をお祈りいたします。
・同人会員の生田日常義丈が八月十三日にご逝去されました。つしんでご冥福をお祈りいたします。

●訂正

・前号（第百三十三号）P10下段6行目・11行目「凡薫」を「凡董」に訂正。
・前号（第百三十三号）P13上段18行目（ナオ三句目）「踏みが来る」を「文が来る」に訂正。
・前号（第百三十三号）P16中段 後ろから4行目「平成二十七年」を「平成二十八年」に訂正。

●今号は、諸般の事情により大幅に発行が遅れ、減ページ発行となったことをお詫びいたします。

季刊 『猫養通信』第百四号

平成二十八年九月十五日発行

猫養会刊

発行人 青木秀樹

〒182-0003

東京都調布市若葉町2-21-16

編集人 鈴木了斎

印刷所 印刷クリエイト株式会社